

肌にはなにも触れていない  
彼女の身は余分な布を纏わない

なめらかな臍の窪みに

冷気が入りこまないように

腹部 その上だけにお祈り程度の

軽いヴェールを巻き付けている

ゆきすぎたほんの少しの圧力も

その自然の大きさから

どれほど凹ませることのないように

ほんの一寸の緩まりで

彼女のからだからはらりと離れてしまわぬように

バランスのとれたリボンの結びで

皮膚に注ぐのは陽のひかりと

彼女を何度も

かろくあくまでもずっと愉快に攫っていかうとする風のたわむれ  
だ

陽の光に乾いていく

彼女のしずかな湿り気は

ぴんと皺のないシーツの清潔を

からだの表面に掛けてゆく

アイロンをゆっくり

けれども焦がし付けないように

シャツをまっすぐに伸ばしてゆくように

しっとり凹み膨らむ彼女の皮膚を

太陽の零す光の粒粒はもてあそぶように

きらきらひかる  
追っては追われては  
彼女も光をもてあそぶ  
指先のおしゃまなくねりで  
肩の曲線のどっしりと落ちてゆく幹で

露出したたおやかな皮膚は  
呼吸をするたび膨れてはへこみ  
影ができては光をつくり  
幾度も静止することはない

貴方をカメラで撮ろうとしたら  
その画面はどこかがかならずブレている  
均等な静止をすることができない  
そのことがただほんとうに  
貴方と貴方の世界を映した  
そう言えることになるのだろう

その皮膚はくびれは誰の手にも触れられるためになく

ゆっくりとでもどれだけ時間がかかっても  
どんなに大きな手を持った  
王さまの指圧をもはね返すだろう

そこに横たえられた裸は  
風と火と花と この大きな星にのみ  
差し出されたからだ

答えるように地面が大きくあくびをする  
血のとどいた枝葉がふるえ  
鳥がぱつ と羽をはばたく  
彼女はそのふるえに気がつく  
ちいさく右のこめかみが痛む  
指で鎮めればまた陽がのぼる